1993年3月15日発行　1975年2月28日第3種郵便物認可
毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円
（送料共）

編集／緑の地球ネットワーク（準）
Green Earth Network

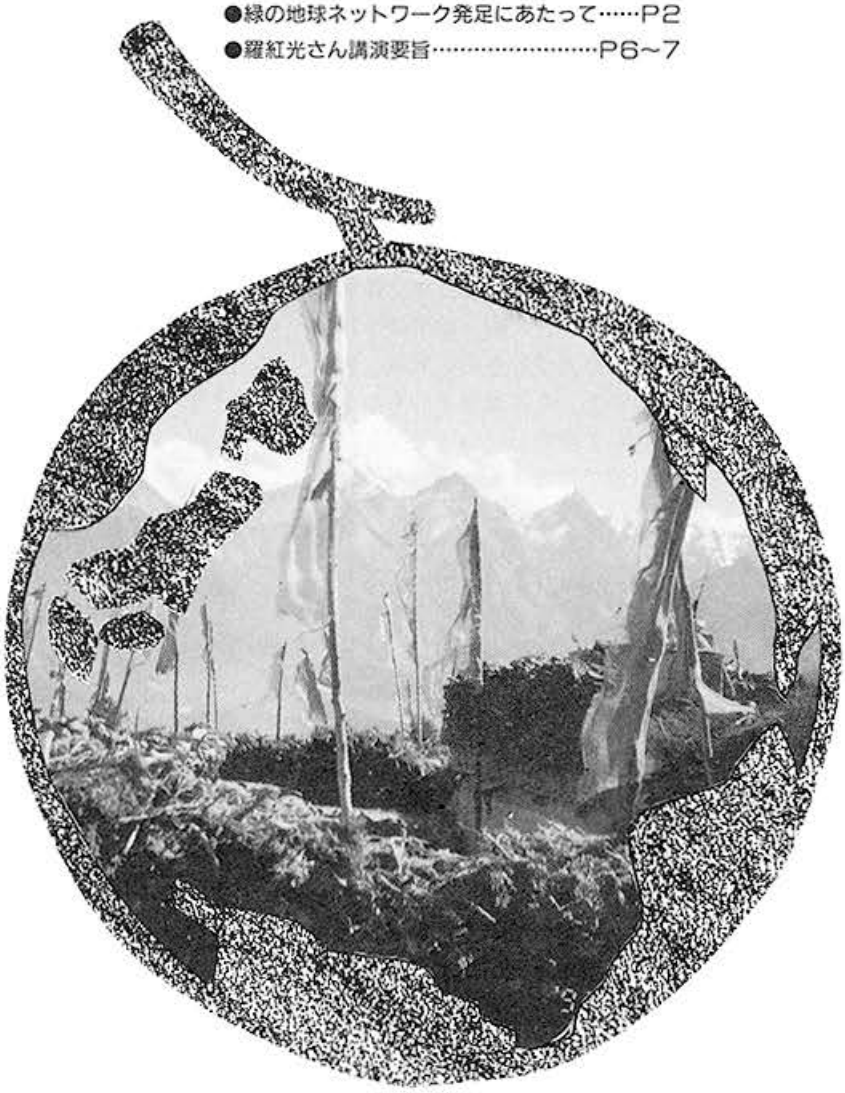
大阪市港区市岡元町３丁目９－16　西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739（〒552）
郵便振替　大阪４－128465

COM21　通巻308号　発行／COM企画室

緑の地球
GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

●緑の地球ネットワーク発足にあたって……P2
●羅紅光さん講演要旨……P6～7



ネパールの山村風景

1993・3
14

緑の地球ネットワーク発足にあたって

地球の緑の再生にむけて 人類の英知を集めよう

代表世話人　佐野 茂樹

工業文明のもたらした環境危機

今、私たちは、あらゆる生命を育む地球と人類の危機のただなかにあります。46億年の地球の運動が造りだした素晴らしい全生命共生の世界が失われようとしています。それは工業文明が地球規模に支配力をおよぼして以来、とりわけ現代の「北」の世界のすさまじい大量生産・大量消費・大量廃棄の活動によってもたらされました。

「北」の人びとの豊かさの追求と浪費ライフスタイルが環境を破壊しています。「北」が「南」の民衆に強制してきた貧窮と悲惨が、基礎的な生命環境を更に危機に追いやっています。こうした現代の主導的な文明に人類の明日を託すことはできません。大逆転、大変革が必要です。それは環境の再生をこそ全ての社会の営みの基底に据えて、人類の自己救済の道を見出す以外にはありません。

共生律の再生へ地球大の合意を

環境を破壊し、人類を自滅の淵に立たせたのは人類自身です。環境の再生は人類自身の意識的な営みが適切になされることによってのみ、ありえることです。地球規模の環境破壊の実相が具体的に克明な全体像として把握されなくてはなりません。そして、一連の危機的な事態に対して緊要な対処が、未来への展望と全体の均衡を考慮してなされなければなりません。

かつて、どの共同体にも自然に息づいていたであろう共生律の再生にむけて、深く、広く地球大の合意形成が必要です。しかし、それは、随所で突出する環境再生のたたかいの成功によってこそ牽引されるでしょう。

環境に即したもう一つの南北関係へ

私たちは、緑を回復し、水と土をしっかり保つことを要（かなめ）として地球環境危機克服を挑みます。すでに55億に達する人類にとって、それら土と水、植生は空気とともに欠かせない不可欠の生存源泉であり、共生の世界の豊かさを回復し、継続するものだからです。

森林を失う社会は水土を失います。水土を失う社会は必然的に廃滅してきました。いま世界の各地で、森林（植生）破壊、水土流失によって生存条件を失した所が続発し、それをはるかに上まわる人びとが、迫りくる危機的状態に置かれています。

とりわけ、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの「南」の世界で顕著です。長い「北」と「南」の累積された関係性が、絶えざる生命の危機、貧困と結びついて、生存環境そのものを失う危険として腐熟していることを直視しなければなりません。

植樹作業に参加した中国の青年

地球環境危機は「北」の「南」に対する略奪と不可分であり、環境修復は南北関係の変革と同時的でしかありえません。環境に即したもう一つの南北関係を創りだすこと、すなわち地球環境のための国境を越えた民衆の交流・協力が不可欠です。「南」の民衆との直接のふれあいが、生活の場であり、生活が支えられている生態環境に根ざした地域で、農山村でこそ求められています。実際に生活の苦楽を共にすることを通して、地域と民衆の現在と未来の生活充実と堅く結びつけて水土保全、森林回復を追求する歩みを踏み出すことができます。

地球環境修復とりわけ水土保全・森林回復のためには「北」の国々の資金拠出による、国際組織・各政府の国際的公共事業の流れが不可欠でしょう。しかし、究極のところ、環境修復の力は人であり、人と人の結びつきです。そして、環境修復をめざす事業がどれほどに大きく、敏速に求められるとしても、いや、そうであればいっそう、「南」の民衆の生きる場である地域において、地域間において、民衆の自発的行為としてなされることが成功の鍵でしょう。

生活の場・地域から環境修復を

森林破壊の攻撃をはねのける力を持たなかった地域、森林を貧しさゆえに消失せざるをえず、水土を失わざるをえなかった地域社会の営みを、水土を保ち、森林を回復する社会の営みへと反転させることは大変に難しいことです。しかし、この地域的営みから突破しなければ、地球環境危機に永続的に挑むことはできないでしょう。そして導きの糸になる世界各地での地域の奮闘と成功に、私たちは接しています。それらの教訓に謙虚に学び、実際に広げようとすることを離れて、緑の地球ネットワークの存在理由はないでしょう。なによりもまず、「南」の諸地域に私たちの身心を溶け込ませること、それを日本で支えること、そこから常に第一歩が始まるでしょう。

賛同者からのメッセージ

芥川福山人（水墨画家）
素晴らしい事であり、必要な事と思います。出来ることで協力ができればと思っています。頑張ってください。

上田　信（立教大学教員）
関東にもネットワークを広げていきたいと思います。

金子　信（豊橋日中事務局長）
準備会の皆様方の御努力によって、4月の正式発足にこぎつけたことに敬意を表します。数千年の人類文明の営みの中で、禿山と化した黄土高原を再び緑の森林にもどすことができるかどうか今でも信じられません。でも森林再生の努力を細々ながらも続けている中国農民の姿に感激しました。ひょっとしたら……。がんばりましょう。

熊野勝之（弁護士）
大阪の緑の少なさにあきれてから、はや25年。近郊住宅地の緑がますます減ってゆくのを、せめてなんとかしたい。まず近郊から。

黒田了一（大阪市立大学名誉教授）
地球規模での森林の喪失、沙漠化の阻止に、全力を挙げて取り組まねば人類の死滅は必至です。原子兵器による頓死と併せて、全人類が相呼応してこれを阻止すべき責任があります。

小島晋治（神奈川大学教員）
すでに遅きに失しているのかもしれません。しかし、やれることはすぐにやらねばならないと思っています。

寺尾光身（大学教員）
これから生まれてくる未来の世代のために何とか環境破壊をくい止めましょう。そのためには、経済成長を続けなければ成り立たない資本主義社会に引導をわたす必要があると思います。

遠山正瑛（沙漠開発研究所長）
黄土地帯は困難でしょうが前進を希望します。

渡辺武達（同志社大学教員）
私も西インド洋のセイセェル共和国の環境保全に協力しています。頑張りましょう。

（敬称略・順不同）

緑の地球ネットワーク シンポジウム

～国境を越える緑の風～

●第1部（PM1時～1時45分）
矢吹紫帆・10万人とふれあうコンサート
緑のメッセージ
～シンセサイザー演奏　矢吹 紫帆さん

●第2部（PM2時～4時50分）
シンポジウム　なぜいまアジアの緑か？

と　き／1993年4月11日(日)
ところ／ピースおおさか・ホール
JR・地下鉄「森の宮」駅徒歩約5分
大阪城公園内
参加費　1,700円（前売1,500円）
主　催／緑の地球ネットワーク
後援／(財)大阪国際平和センター(ピースおおさか)

■パネリスト

槌田　劭さん
京都精華大学教員

石田 紀郎さん
京都大学教員

稲村 昭南さん
アジア自然塾塾頭

深尾 葉子さん
大阪外国語大学教員

■当日GEN会員総会を行います。
●4月11日午前11時～12時(予定)
●アビオ大阪(大阪市立労働会館)

ネットワーカーズ

堀越　由美子　さん
セイクレッド・ラン日本事務局代表

1978年「ＹＵＭＩ'Ｓ生活学研究所」開設。ラマーズ法出産指導で母親ネットワーク。1986年映画「ホピの予言」関西上映運動に関わる。1988年から先住民族の国際的なキャンペーン運動、セイクレッド・ランの日本事務局を担当。同時にアイヌ民族との魂の交流を結び目とする国際的なネットワーク運動をすすめている。また、大阪・心斎橋で自然食天麩羅ごはんの店「若松」を経営。

「夜明けへの道」―はじまりの 500 年に寄せてアメリカ先住民族は語る―という本が出版された。この本を企画監修したのが堀越由美子さん。

大阪・心斎橋の「セイクレッド・ラン日本事務局」の事務所は、いつも若い人たちや、肌の色、言葉の違う人たちでにぎわっている。みんな堀越さんの人柄を慕ってやって来ているのだとわかる。彼女の話し方には人間の感性に直接語りかける独特の表情がある。理屈は話さず聞かない。しかし鮮明に言葉が残るのである。

「ほらインディアン・タイムってのがあるでしょう？日本ではルーズでいいかげんなという意味で使われてるけど、ほんとは〝物事は時が来ないと進まない。人間ではなく、自然という神の采配によって時が決まり、コトが進む〟という奥の深い意味なの。私にとって先住民族の人たちをはじめ、すべての私とつながる出会いはインディアン・タイムでやってきたんです。」

だからある時点を境にまるで神の采配のように運命的な人びととの出会いがあったのだそうだ。

今年が「国際先住民年」だからといって、興味本位でかかわることはよしたほうが良いと堀越さんは言う。「日本人は、土足で勝手に他人の家にはいりこむような『鈍感病』にかかっている。先住民の世界は『オキテの世界』であって、それを知らないと大変なことになるんです。無知は最大の犯罪なのです」という堀越さんの指摘は、現在の国際協力活動にも相通じる重さがある。この本の副題「はじまりの 500 年に寄せて……」は、いまなお虐殺がつづくコロンブス以来の 500年から自分を解き放とうとする者にだけ、はじめて世界の先住民族との魂の出会い―インディアン・タイムがはじまるのだという意味が込められている。

幼少より虚弱だったというきゃしゃな体つきからは窺い知れないその元気印のみなもとを探ると“ミタクエ・オヤシン”というキー・ワードが浮かびあがる。アメリカ・インディアンの祈りの言葉で「わたしにつながるすべての生命あるもののために」との意味だそうだ。英語の“ ALL MY RELATIONS ”にあたる。彼女の座右の銘でもある。

山西省の自然

石原忠一
（第一次緑化協力団団長）

⑧山羊

創めに森林ありき

人類が農耕・牧畜を始める以前の地球も現在と同じ気候状態と仮定して、森林面積を計算しますと、全陸地面積の45%が森であったといえます。それが今20%を割り、21世紀初頭には17%になると案じられています。

1972年秋、初めて私が訪中したときは、広州から中国縦断の列車の旅でした。長沙から韶山に入りましたが一面の水田風景は、日本にそっくりで、毛沢東の生家の農器具なども見覚えのあるものばかりでした。食事は、ゆく先々の郷土色がでますが、武漢、北京と北にゆくにつれて米飯が消えて、小麦を主とした饅頭に変わってゆきます。

2000年ほど前から日本を包んだ弥生文化の源流である江南の稲文化圏から華北のコムギ文化圏へ入ってゆくのを体験しました。沿線の農村や都市が緑化に懸命な努力をはらっているのに感嘆しましたが、コムギ文化には牧畜がともないます。山西省の年降水量400ミリ（大阪1700ミリ）の農地は耕して天に到るまで、森を伐ったのですが、もっと徹底して緑を食いつくすのが過放牧による圧力です。

昨年５月に訪ねた大同県の徐町郷は人口5000人足らずの純農村ですが、山羊の放牧を専業とする伝統的家族が３戸あって、200 頭ほどずつ山羊を追ってました。

５月15日の人民日報は、人工造林面積は33.3万㎢を超え世界首位であり、多樹種、多林種を堅持して、多くの効能を結合する、また森林被覆率は、建国前の 8.6%から13.4%にのびたと報じました。ちょっと古い1984年の資料で、山西省全省の森林被覆率は10.3%渾源県は、わずか 4.2%です。

5000年の黄河文明を支えた、山西省の水土流出の原因が、コムギ、羊、山羊であったとすると、植樹緑化がどんな困難な事業か想像できます。それでもこの蒼い、水に濡れた惑星の上で、生命の歴史の果てに人類が誕生してから 200万年、いまも生きつないでいるわたしたち（ホモ・サピエンス）が手にしている唯一の選択枝は森林を復活させるということ。それしか生き残る道はないのですから……。

4月、第三次中国緑化協力団出発

4月27日から5月7日まで、山西省雁北地区の黄土高原に、93年の緑化協力団を派遣する計画が着々とすすんでいます。これまでに予定の10名に近い応募がありましたが、まだ数名は可能ですので、参加を希望される方は大至急にご連絡ください。

今回は農業関係に経験のふかい人、経済関係に明るい人など、壮年層を中心に多様なメンバーになりそうです。93年からは、渾源県との協力をいっそう深める一方、雁北地区の青年たちがすすめている桑干河青年森林プロジェクトとの関係を具体化することになっています。3月末から出発までに数回のミーティングをもち、現地との重層的な協力関係をうちたてるよう努力したいと思います。

協力団は北京・大同をへて、現地雁北地区の緑化の状況を考察し、協力関係をにつめ、大同では雲崗の石窟、万里の長城などの観光もおこなう計画です。GEN正式発足後、最初の協力団の成果にご期待ください。

ネパール緑化協力本格スタート！

GEN調査団派遣（5月末）決定！

本格的なネパール緑化協力を、最重点地域であるムスタン王国地域調査から始めることになりました。アジア自然塾と共同。GENからは次の5人が参加します。

喜多亮夫（学生）、高力憲子（学生）森脇久子（会社員）、東間徴（GEN世話人）、佐野茂樹（GEN代表）

6月初旬、ポカラから歩きはじめ、まずムスタン奥地を目指します。ネパール最多雨地から超乾燥地に至る全ムスタンの風土と人々に接した上で、7月、育苗・植林候補地の村々で直接村の人々と調査、計画作成に入ります。

大雨、強風、それにコレラ・マラリヤなどの伝染病、高山病、山ヒル群の恐怖の中、標高1000～4000mのアップダウンを5週間の道行きとなります。

私たちにとってのこの非日常性も現地の人々にとっては全くの日常性。ヒマラヤ緑化に着手するのに、ここから接近するのは当然の前提でしょう。そうした上で、私たちと村の人々とがはじめて感応し、親和し、協働する意欲をともにする関係性が芽生えるでしょう。緑化条件の調査・計画成功の要は人々との魂に触れる出会いです。

日本ビジネススクール専門学校

環境テーマに制作発表展～

前号でご案内したように、3月9日から11日にかけて、大阪の国際交流センターで日本ビジネススクール専門学校デザイン学科の作品展が開かれました。「国際交流と地球環境」をテーマに、1年生の集団制作のオブジェ、卒業生の個人作品が展示されました。

「最初は遊び半分だったんですけどね、テーマについて自分たちで勉強しているうちに、これはたいへんだ！ということになって……」ということでしたが、地球環境の現在を若々しい感性で切り取った力作がおおく、会場にかけつけたGENのなかまも感心していました。

会場受付で空き罐や古新聞などでつくったマスコットやバッヂが売られ、その収益をGENをつうじて黄土高原の緑化にご協力いただけるそうです。

若いみなさんが地球環境を修復するために、具体的な活動をはじめていることは力強いことです。

若い感性があふれる作品展会場

自然と親しむ会

ヒノキの間伐

- 4月18日（日）朝9時20分
  南海・近鉄「河内長野」駅
  バス乗り場案内板前集合
- 延命寺ちかくのヒノキ林
- 会費　大人 700円　小人 500円

今回は「ヒノキの間伐」に挑戦！

この山は手入れが遅れ、植林後20年、直径10～20cmのヒノキがこみあい、15cmほどの太いマダケやメダケがたくさんはえています。ベテラン林業者の指導でこれらを伐り、ヒノキの生育環境をとりもどします。

伐ったヒノキ、タケは持ちかえり自由、時季があったらタケノコのおみやげつき。

弁当持参。車のある人は車で。雨天のさいは別の予定をくみます。会費には保険料を含みます。4月15日までに必ず申し込んでください。

労組で環境問題学習会

自治労阪神淡路ブロック

3月1日、淡路島の洲本市で開かれた自治労阪神淡路ブロックの総会と学習会に、GENの高見世話人が参加。「黄土高原の森林再生」と題する報告をおこないました。30枚ほどの写真パネルを示しながら、日本とはまるでちがう自然環境と、現地の人びとの緑化への熱心な努力を、1時間あまりにわたって報告しました。

それに先だつ総会でも「いま地球環境のための活動をつよめるべきだ」という発言があり、報告もたいへん熱心にきいてもらいました。出席者70名のほとんどの人に「黄土高原に緑を！」の絵はがきを買っていただくなど、はげまされた1日でした。

14

華北地方フィールドワークの現場からみた

中国経済改革の現状とＮＧＯの役割

羅　紅光さん

―アジア協会アジア友の会会員・大阪大学大学院 留学生―

羅さんは中国から大阪大学大学院に留学、文化人類学を専攻する一方で、アジア協会アジア友の会の外国人スタッフとして活躍中です。昨年、半年間の中国華北でのフィールドワークをもとに、中国の経済改革の現状、環境問題や中国ＮＧＯの実態について興味深い話を聞きました。（２月25日）

私は今日、ローカルな視点で、改革開放後の中国経済について、環境－地域生態系に根ざした農村地域民衆の生活実態に即してお話しします。

私が今回のフィールドワークで調査テーマにしたのは、個体戸とりわけ万元戸です。都市の商業関係の個体戸ではなく、農村の個体戸です。商業万元戸は地域固有の文化を離れて、自由に移動可能です。しかし農村の創造的な生産個体戸は、地元基盤に立って生産する、国家体制とはちがう富を生む組織集団－家族、血族、血縁関係的な集団もしくはネットワークです。地域の環境をとらえる場合、この個体戸の動きを通して見ることが有効です。

以下に、村での個体戸の実例や、復活した宗教活動――民衆信仰を通した環境修復の動きをご紹介します。

兎小屋経営から自主的植林へ

＝山東省玉皇山＝

この村は海（渤海）にほど近く標高100mくらい、以前は革命根拠地でもありました。農民にとって最も困難なことは農耕生活であるにもかかわらず「土がない」こと。つまりあたりは石山で土壌が薄いのです。農民は土をよそからもらってしのいできました。

ここに３年前、国連プロジェクトでウサギ小屋経営が導入されました。経営にあたるのは、個体戸よりもう少し規模の大きい郷鎮企業です。

毛の長い「アンゴラ種」のウサギですが、土のない、したがって土から得られる収入の少ない農村にたいへん歓迎され成功しました。

初期のもうけを資本にまわすのではなく、平均30羽のウサギを農家（個体戸）に配分したことが特色です。むろん、伝染病感染などには心を配っています。兎毛は輸出用に、肉は国内消費用です。各個体戸の自立した経営で、増殖したウサギをマーケットをへて国家に売り、収入源としています。貧しかった所ですが、なぜ故郷に留まったか、それはウサギ経営から出発して村の充実を展望できるからでしょう。

玉皇山の兎小屋。中央が経営者の青年農民

個体戸は６人くらいの血族、血縁の近い労働集団です（６人を越えると郷鎮企業に近づきます）。この６人がウサギ小屋経営を軸に、様々な仕事を細分化し、分担しています。野菜作り、ウサギの世話、草栽培、ウサギの糞処理など。個体戸の経営の中に、地域に根ざした循環が成り立っています。

もうける金は年 5～6000元で、中国の農村では破格の高収入です。個体戸の経営規模は 300羽で安定させ、純利は他に投資することになります。地域の生態系が生み出しうる生活の多様性―豊かさの追求です。たとえばリンゴ園（山東省はリンゴ栽培の適地）の経営などです。しかし、安定した買い手をみつけることで難点があります。ウサギ経営の脆い点も同様で、国家が責任をもって買い取ることが必要です。こうした生活の充実が村の自主的な植林（果樹）に向かうことになります。

生態系に依拠した農民の知恵

＝河北省大興県留民村＝

ここはその名の通り、もともと異郷の旅人たち（たとえば黄河の水害で故郷を離れた人たち）が寄り集まり、留まることで築きあげた村です。今、実験のさなかで、生態村と呼ばれています。それは、生活の要であるエネルギー源としてメタンガス発生装置と太陽光を活用する点に示されています。

1984年からドイツＮＧＯの助けで糞や草の利用によるメタン装置が各戸にとりいれられ、また大きなタンクから各戸にパイプで配給するネットワークも整っています。また太陽熱の釜が各戸にあります。

村の個体戸は、職業分担し（食糧、

各戸に太陽熱利用の釜がある生態村

豆、果樹、花といったように）これによって各家庭の生計をたてています。各戸が富むことで村の存在理由がなくなるかというとそうではありません。各生産グループ間に、また各プロジェクト（森林保全、灌漑といった）間に連携をもたせ、互いに売り手・買い手となり、利益の交換がなされます。それは経済的取引というのではなく、村の生態系に基づいた互いの社会的な互酬関係だといえます。

村が直接依拠する生態系を基盤として、一見バラバラの生産グループがバランスよく共存し、個体戸も村全体も富むことができます。

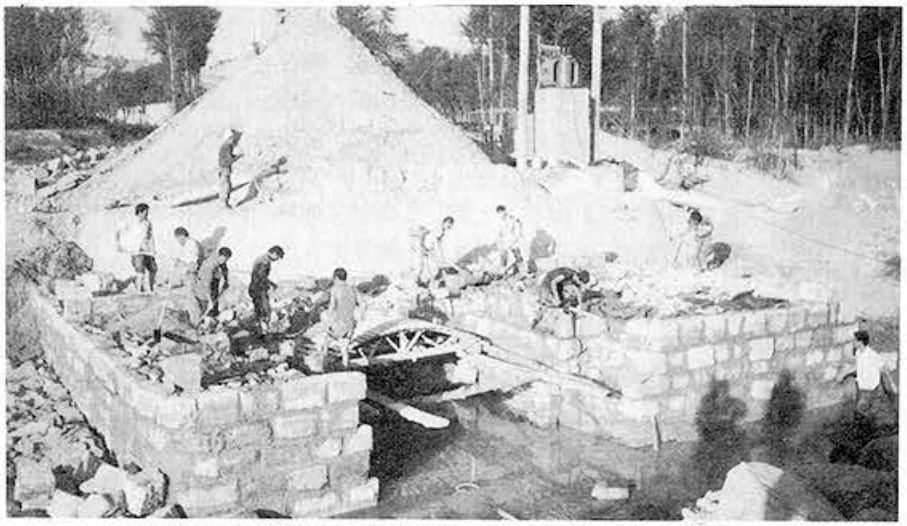
実際、収入が多く生活条件が良い。いっしょに行った北京の大学教授の家より広く良い家がいっぱいあります。北京にほど近く、車で30分くらいですが、村の人々は北京へ出ていきたがりません。村の方が良いからです。村で生産されたものは、村を十分満足させた上で、他所に持ち出されます。

民間宗教が村おこしのNGO
＝陝西省北部黒龍潭＝

ここは私が文化革命期に下放していた村の隣の県にあります。雨が少なく「水が油よりも貴重」なところです。人々は雨を待ち望み雨水を飲みます。これはおいしい。しかし、井戸水、流水をそのまま飲むことはできません。細い泉が湧きますが、これが黒竜潭です。竜（つまりは水神）を祭る廟があり、まわりに９つの村があります。全部あわせて（人民公社時代の）旧生産大隊にあたります。各村 200人余、全部で2000人ほどです。

この村には、祈雨（雨乞い）の習慣があり、占いに行動の指針を求める習慣があります。これまで長い間、宗教はアヘンだとして抑えられていましたが、改革開放以来、広く復活してきました。古来からの「民俗宗教」というよりも、いわば民間信仰です。廟信仰を文化の要とする村習俗が復活し、村人のみならず祭りに集まる人々から、お布施、お賽銭が集まるようになりました。年に50万元に達する巨額です。

これを資金として、廟の修築や、生活に困った人々に拠出され、学校建設や教育基金に投入されています。村を基盤から良くすることによって生活を充実させようとする希望のあらわれです。この中に、しっかりした植林が進んできました。1992年来、30万元を投入して灌漑水路が作られました。またあたりの一木一草とてなかった禿山に植林し、木が生い茂るようになったのです。これは政府からの命令ではないし、資金供与を受けたのでもない。古くからの信仰・文化が復活することによって、自分たちの生活の場から木を求め、全く自発的に、きわめて民衆的な営みとして植林を成功させ、持続させてきたのです。



村の廟のお布施・30万元を投じて建設がすすむ灌がい用水路（黒竜潭）

国家の上からのプロジェクトと地域民衆の下からの環境修復

中国政府も環境危機、環境修復を語るようになっています。しかしその結果や実態、たとえば中国の森林率を何パーセントに引き上げると発表することは誰のためのものか。これを受ける側の民衆の生活実態、地域の生態系とどう結びつくのか、よくわからない。

国家規模のプロジェクトは必ず環境破壊を生みますが、それに対処するにはローカルな視点が必要です。

中国に限らず、国家レベルの開発は過剰に進行しますが、先の三つの村の例でみたように、村・地域・住民発意の開発はまったく異なり、環境に根ざし、環境を破壊しません。

環境破壊――森林消失に対処するのには、その地域でなぜ木は伐られたのか、その本当の原因をつかまなければなりません。まず調査から！　それは地域住民の、農村民衆の生活実態を知り、地域と人々の基本的必要事とその要（かなめ）をつかみ、その実現方向を見定め、その中に木を植え、育てる可能な条件を見いだすことです。地域の人々の共感と愛情に支えられなければ、植林は成功しません。

しばしば中国の上からの植林が地域で失敗するのは、地域の文化や生活を無視するからです。植林義務労働は、人々にとって強制された疎遠なもので内発的なものではありません。植えられた木も同様で、地域のもの、自分たち自身のものとは思えないとすれば、育てようもないでしょう。

（文責　編集部）

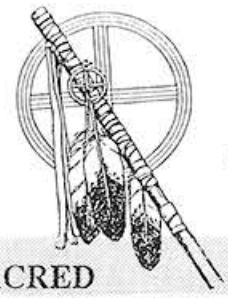
各団体の催し&とりくみ

3月27日㈯ 午後5時30分～
「熱帯雨林破壊とプランテーション」
お話　坂本竜五さん（ジャーナリスト）
主催　ウータン～森と生活を考える会
参加費　700円

4月3日㈯ 午後6時～
LUNAS（ルナス）の集い
●フィリピン人元「慰安婦」と共に
●ところ　アピオ大阪 305号室
●参加費　800円
問い合わせ先　06-945-9212 原田さん

4月24日㈯ 午後2時～
アムネスティ入門セミナー
●ところ　アムネスティ大阪事務所
●参加費　300円
●連絡先　06-376-1496 篠宮さん

5月1日㈯～4日㈫
蒼生舎「生き活き塾」
●有機農業体験講座／和歌山県有田の山村で鶏、牛などの飼育と田畑での農作業を通して農的生活を学ぶ。
●参加費　12,000円（宿泊代込み）
●連絡先　和歌山県有田郡金屋町大字瀬井934
☎0737-34-3119 神谷さん
※そのほか蒼生舎では4月末頃から10月末まで「米つくり実践教室」をひらき、無農薬・無化学肥料によるお米の作り方を実地で教えます。ご希望の方はお早めにお問い合わせください。
参加費は、一人12,000円。定員5名。定員に達し次第しめきります。
問い合わせは、蒼生舎またはGEN事務局・東間まで。（4月10日頃まで）



今年のセイクレッド・ランは、9月からオーストラリア～ニュージーランド間で開催されます。日本事務局では現在一般参加者を募集中です。
またインディアン・ランナーのための渡航費・参加費の支援カンパも募っています。詳しいことは下記の日本事務局までお問い合わせ下さい。
●連絡先およびカンパの送り先
〒542 大阪市中央区西心斎橋1-10-41
セイクレッド・ラン日本事務局
☎06-252-4148 FAX.06-252-8180
郵便振替　大阪9-119568

編集後記

過ぎてみれば、あっという間の一年でした。早いもので、GEN準備会編集の最後の会報となりました。これまでいろんなかたがたの知恵、技術、善意に助けられて発行を続けてこれましたことを、紙面を借りてお礼申し上げます。次号からは正式な編集体制でスタートです。新しく出発する「緑の地球」に、みなさんさんのご支援をよろしくお願いいたします。　（東間）

大きなことは、すぐにはできませんが、日頃の生活の中で小さなことからコツコツときずきあげていけば成功するものだと、羅紅光さんのお話を聞いて感じました。みんなで一緒にTHINKからDOへともっていけるように努力したいものですね。

北野恵美